

人工採苗アワビの放流試験

中西 広義・福田 慎作

はじめに

当センターでは、昭和43年以来、毎年エゾアワビの人工採苗を行ない、得られた稚貝は県内各地のアワビ漁場に試験的に放流してきた。しかし、その数量が少なかったこと、追跡調査が不十分であったことなどから、放流効果は十分に把握されていなかった。昭和48年度および50年度の放流試験においては追跡調査の結果、放流稚貝のサイズや放流場所の環境条件の差などによって、再捕結果に大きな差を生ずることが認められた。そこで、昭和51年度には、当センターで昭和50年度に人工採苗し、4ヶ所の漁協アワビ種育苗成場で中間育成した大型種苗を、それぞれの地先に放流する方法をとってみた。その状況を報告する。なお、放流後の追跡調査結果は、次年度報告の予定である。

(1) 漁協アワビ種育苗成場における中間育成状況

使用した稚貝は、昭和50年4～5月に当センターで人工採苗し、水槽内で主として褐藻類を用いて飼育した1年貝で、昭和51年5月から11月まで県内4ヶ所のアワビ種育苗成場で中間飼育した。中間育成結果は第1表、第1図のとおりである。

第1表 アワビ種育苗場における中間育成結果

漁協名	中間育成期間	中間育成数量			稚貝の殻長		
		開始時	終了時	歩留り	開始時	終了時	成長
八戸	昭51.5.24～昭51.11.17(177日)	10,000	9,620	96.0	1.0 (cm) ～1.5	1.63 (cm) ～3.63	0.63 (cm) ～2.13
三厩	" ~ " 18(178日)	"	9,700	97.0	0.7 ～2.5	1.1 ～4.5	0.4 ～2.0
佐井	" ~ " 13(173日)	"	7,500	75.0	1.0 ～3.0	1.8 ～5.0	0.8 ～2.0
大間	" ~ " 14(174日)	3,000	2,721	91.0	0.8 ～1.5	2.0 ～3.0	1.2 ～1.5

(2) 放流場所および放流方法

放流場所は、第2表および第2～5図に示した4ヶ所で、それぞれ第2表に示した様に、昭和51年11月に実施した。また放流稚貝数とそのサイズは、第1表に示した中間育成結果と同一である。放流作業に当っては、スキューバ潜水により、稚アワビを黒いポリエチレン波板(60×50cm)に付着させそのまま海底に並べ、稚貝が自然分散するのを待った。この間約10分位を要した。

第2表 放流場所および時期

放流場所	放流時期	放流場所の水深
三厩村平磯	昭51.11.8	3.0(m)
佐井村原田	51.11.13	2.0～4.0
大間町割石	51.11.14	2.0～3.0
八戸市大久喜	51.11.17	4.0～5.0

(3) 放流場所の環境条件

放流の際に、放流場所付近の環境条件をスキューバ潜水により観察した。その状況は次のとおりである。

① 三厩村平磯地先

漁港から約 100 m 沖合いの平磯という大岩の南側で、底質は礫地帯で礫には海藻の着生がほとんど観察されなかった。

② 佐井村原田地先

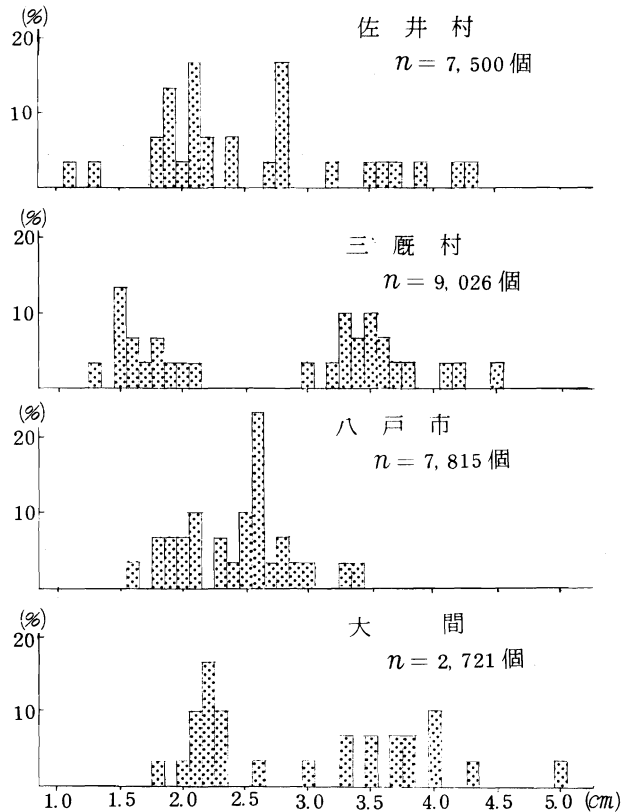
原田漁港から約 20 m のところで底質は礫、転石地帯でその大きさは 10 ~ 80 cm 程度のものである。礫、転石地帯にはホンダワラ類が多く観され、動物では、天然小型アワビ、ヒトデ、砂ヒトデなどが観察された。

③ 大間町割石地先

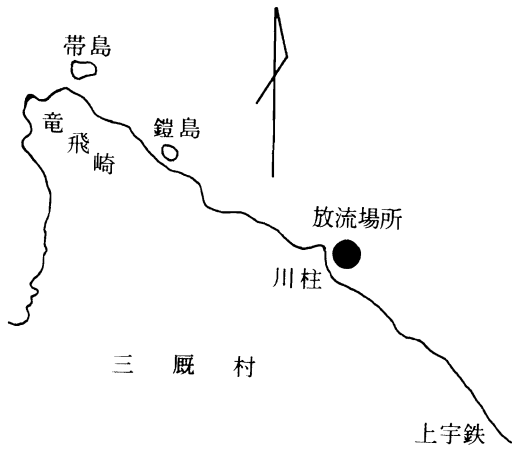
大間崎灯台とアワビ種育苗成場との中間あたりで距岸約 500 m ぐらいのところである。底質は大型な根が岸から沖合に長く伸び、その底質全体が同じような状況である。大型な根にはホンダワラ類が主でツノマタ、アカハダなどが観察された。

④ 八戸市大久喜地先

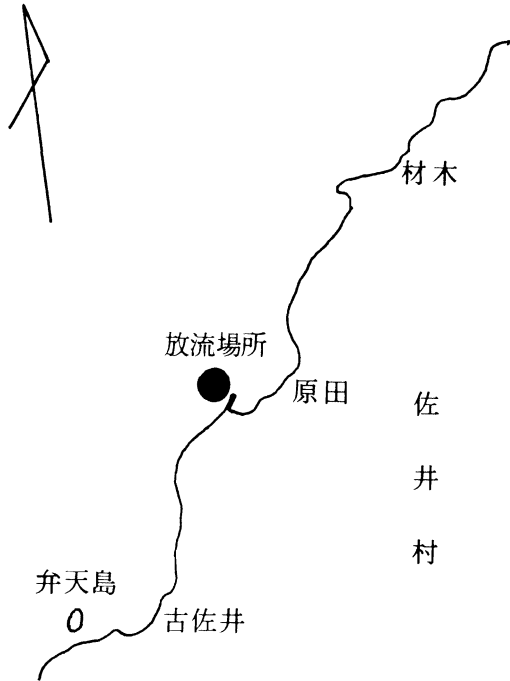
底質は大型な岩礁からなり凹凸がはげしく、ところどころに大きなくぼみがあり、干潮時には露出する部分もある。岩礁の上にはチガイソ、アカハダが少々見える程度で、天然の大型アワビが多く観察された。



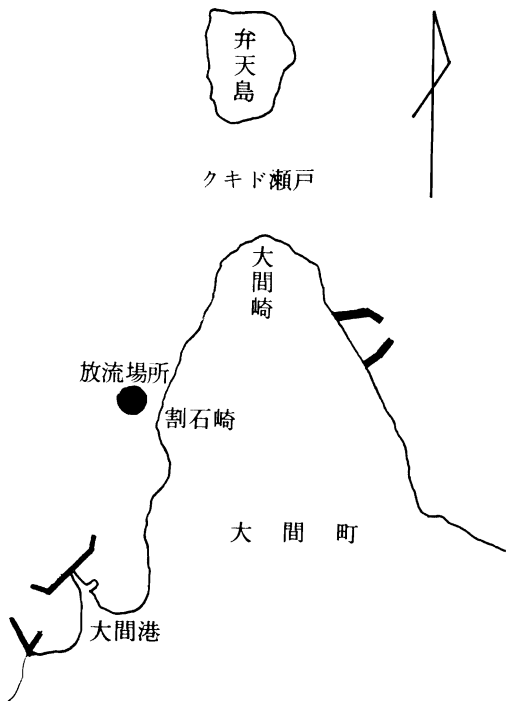
第1図 放流貝の殻長組成



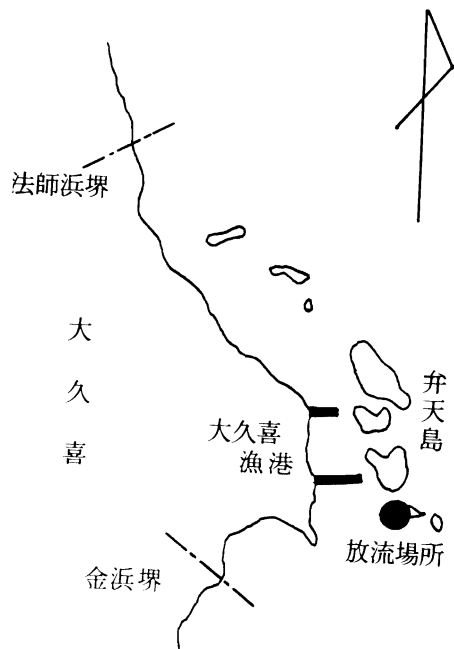
第2図 三厩村平磯地先の放流場所



第3図 佐井村原田地先の放流場所



第4図 大間町割石地先の放流場所



第5図 八戸市大久喜地先の放流場所